Special Feature

ニッキー・ホプキンス【NICKY HOPKINS】特集

～ 伝説のセッションマン＆ミュージシャンに愛されたピアノマン ～

写真：ドキュメンタリー『セッションマン：ニッキー・ホプキンズ ローリング・ストーンズに愛された男』©THE SESSION MAN LIMITED 2024

今号の巻頭特集は、ザ・ローリング・ストーンズ、ザ・ビートルズ、ザ・フー等、1960~1970 年代のロックシーンを代表する伝説のバンドをはじめ、ジョン・レノン、エリック・クラプトン、ジェフ・ベック等のレコーディングに参加して、数々の名演を残している伝説のセッションマン＝ニッキー・ホプキンス特集。1944 年 2 月 24 日、英国ロンドン郊外のイーリングで生まれ、6 歳の頃からピアノのレッスンを始める。ロイヤル・アカデミー・ミュージックでクラッシックピアノを学び、幾つかのバンドに参加。闘病生活を送った後、セッションマンとしてのキャリアをスタートし、精力的にツアーやレコーディングに参加。数々の名演を残し、数々の名作に名を刻んだ。1994 年 9 月 6 日に 50 歳で天に召されるまで、音楽を愛し、音楽に愛された。そして、9 月 6 日の 30 回目の命日に合わせて、ニッキーの軌跡を時代とともに振り返る音楽ドキュメンタリー『セッションマン：ニッキー・ホプキンズ ローリング・ストーンズに愛された男』が公開された。ミュージシャンに愛されたピアノマン、真の“ミュージシャンズ・ミュージシャン”であったニッキー・ホプキンスの魅力に迫る。（The Walker's 加瀬正之）

【NICKY HOPKINS's Best Sessions】

ニッキー・ホプキンスを知らない音楽ファンに、これぞニッキー・ホプキンス！と言える楽曲を紹介したい。まずはローリング・ストーンズの「悲しみのアンジー」。アコースティックギターの響きと共にニッキーの哀愁に満ちた絶妙なコードワークが光る。同じくローリング・ストーンズの「シーズ・ア・レインボー」。ニッキーの印象的なピアノで始まる曲で、ピアノソロもニッキーの個性が際立っていて素晴らしい。その他、ジョー・コッカーの「ユー・アー・ソー・ビューティフル」、ジョージ・ハリスンの「ギヴ・ミー・ラヴ」、リンゴ・スターの「ユーアー・シックスティーン」、ポール・マッカートニーの「ザット・デイ・イズ・ダーン」等、ビートルズのメンバーのソロの楽曲でも素晴らしいピアノを聴かせている。そして、忘れてはならない楽曲は、ジョン・レノンの名曲「ジェラス・ガイ」。オープニングから終始ニッキーのピアノが美しく優しく響き渡る。

【NICKY HOPKINS with Bands】

ニッキーは 1960 年に初代サヴェイジズの一員となって以降、1962 年よりクリフ・ベネット＆ルーザーズ、シリル・デイビス・R&B・オールスターズで活動。1963 年にクローン病を患い、1 年半ほど闘病生活を余儀なくされる。その後、セッションワークをスタートさせ、ソロアルバムも発表する傍ら、1966 年にソウル・サヴァイヴァル、1968 年にジェフ・ベック・グループ、1969 年にクイックシルバー・メッセンジャー・サービス、スィート・サーズデイに参加した。またこの頃、ジェファーソン・エアプレインのキーボーディストとしてウッドストック・フェスティバルに参加した他、スティーヴ・ミラー・バンドのアルバムに参加する等、サンフランシスコ・サウンドの確立にも貢献した。そして、1971 年からローリング・ストーンズのツアーに参加。1975 年にはジェリー・ガルシア・バンドに参加し、1979 年にはナイトにも参加している。

【NICKY HOPKINS vs Crohn Disease】

ニッキーは若い頃からクローン病と闘いながら、音楽活動を続けていた。クローン病とは炎症性腸疾患の一つで、全消化管に炎症が発生する可能性のある原因不明の病気と言われている。1963 年 5 月に病院に緊急搬送され、クローン病と診断されたニッキーは、1964 年 12 月まで 19 カ月間の療養生活を余儀なくされる。1965 年に活動を再開するが、体力的な問題もあってスタジオ・ミュージシャンの仕事を中心としていくこととなった。1967 年には第 1 期ジェフ・ベック・グループに参加するも、体力的な問題で 1969 年 6 月に脱退している。その後も何度かフルタイムメンバーとしてバンドに参加したが、短期間での脱退となったことは致し方ない。だがその結果、数多くのミュージシャンの作品に参加し、数々の名演・好演を残し、“ 伝説のセッションマン ” と称されるに至ったことは不幸中の幸い、正に “ 夢見る人 ” と言えるだろう。

【NICKY HOPKINS with ROLLING STONES】

ニッキーのローリング・ストーンズとの活動は、ストーンズのアルバム～『ビトウィーン・ザ・バトンズ』『サタニック・マジェスティーズ』『ベガーズ・バンケット』『レット・イット・ブリード』『スティッキー・フィンガーズ』『メイン・ストリートのならず者』のレコーディングへの参加の他、1971 年のイングランド～スコットランド・ツアー、1972 年の北アメリカ・ツアー、1973 年のオーストラリア～ニュージーランド・ツアーにも参加した。また、1969 年の『レット・イット・ブリード』のレコーディング期間中、スタジオでキース・リチャーズの到着を待っていた時に、ミック・ジャガー、ビル・ワイマン、チャーリー・ワッツ、ライ・クーダーと共にジャムセッションを行ない、この時のセッションの音源は 1972 年にローリング・ストーンズ・レコードから『ジャミング・ウィズ・エドワード』（※エドワードはニッキーの愛称）のタイトルでリリースされた。

【NICKY HOPKINS with BEATLES】

ニッキーとビートルズとの活動では、1968 年にリリースされた「レボリューション」のシングル・ヴァージョンのレコーディングでエレクトリック・ピアノを弾いているが、ビートルズ解散後、4 人のメンバーのソロ作品にも数多く参加している。ジョンのアルバムは『ウェディング・アルバム』『イマジン』『サム・タイム・イン・ニュー・ヨーク・シティ』『心の壁、愛の橋』『ジョン・レノンの軌跡』の 5 作品の他、コンピ作品にもクレジットされている。ポールのアルバムは『フラワーズ・イン・ザ・ダート』の 1 作品のみだが、ジョージのアルバムは『リヴィング・イン・ザ・マテリアル・ワールド』『ダーク・ホース』『ジョージ・ハリスン帝国』の 3 作品、リンゴのアルバムは『リンゴ』『グッドナイト・ウィーン』の 2 作品に参加している。ビートルズのアルバムに参加した鍵盤奏者ではビリー・プレストンも有名だが、ニッキーとビートルズのメンバーとの絆は深い。

【THE TIN MAN WAS A DREAMER】

1973 年にセカンドアルバムとして発表された『夢見る人（原題：The Tin Man Was A Dreamer）』はニッキーの代表作の一つとして語り継がれている。参加ミュージシャンはジョージ・ハリスン、ミック・テイラー、クリス・スペディング、ライ・クーダーに、サックスのボビー・キーズやベースのクラウス・ヴォアマン等、豪華な顔触れ。タイトルに自身の愛称を冠して、オルガンを披露している「エドワード」、当時の妻に捧げられたナンバー「ドリー」、アルバムタイトル曲の美しいバラードナンバー「夢見る人」、ボビー・キーズのサックスとニッキーのピアノが最高にカッコいいラストの「ピッグズ・ブギ」等、全 10 曲が収録されている。ニッキーは歌声も披露しているが、ピアノ同様に味わい深い。このアルバムには、ニッキーのピアノマン、アーティストとしての魅力が詰まっているだけでなく、作品全体にニッキーの優しい人柄も滲み出ている。

【NICKY HOPKINS with STRAY CATS】

ストレイ・キャッツのベースマン＝リー・ロッカー、ストレイ・キャッツのドラマー＝スリム・ジム・ファントム、デヴィッド・ボウイやジョン・レノンのサポートで知られるギタリスト＝アール・スリックの 3 人で結成した“ファントム、ロッカー＆スリック（Phantom, Rocker & Slick）”。リー・ロッカーがメインヴォーカルで、ストレイ・キャッツでお馴染みのアップライトベースではなくエレキベースを弾き、スリム・ジム・ファントムもストレイ・キャッツでお馴染みのスタンディングドラムではなく、ドラムセットでプレイしていたロックバンドで、1985 年にセルフ・タイトルのファーストアルバムをリリースしている。スペシャルゲストとして、ローリング・ストーンズのキース・リチャーズと共にニッキーも参加している。アルバムラストに収録されている「Lonely Actions」では、ニッキーのピアノがフィーチャーされており、ニッキーのソロは最高に素晴らしい。

【NICKY HOPKINS with JAZZ】

ニッキーはジャズとの接点もある。永遠のジャズシンガー、エラ・フィッツジェラルドが 1969 年 5 月にロンドンのオリンピック・サウンド・スタジオズでレコーディングしたアルバム『エラ』に参加している。ニッキーのソウルフルなピアノから始まる「ゲット・レディ」がオープニングを飾り、ニッキーのブルージーなピアノが印象深い「イエロー・マン」、ニッキーらしいロックンロールピアノが聴ける「アイ・ワンダー・ホワイ」、ニッキーの優しいピアノが胸を打つ「オー・ベイビー・ベイビー」等、10 曲を収録。エラはビートルズの「ゴット・トゥ・ゲット・ユー・イントゥ・マイ・ライフ」と「サボイ・トラッフル」も披露しており、ロック～ソウルっぽいアルバムに仕上がっている。尚、このアルバムの裏ジャケットには「Special thanks to Nicky Hopkins」と記載されており、ニッキーに対するエラの感謝の気持ちが伝わってくる。

【NICKY HOPKINS with JAPAN】

ニッキーは 1988 年 7 月に東京ドームで行われたアート・ガーファンクルのソロ公演のバックバンドとして初来日を果たしている。それまで来日の機会がなかったことが不思議だが、日本との縁は他にもある。1980 年に発表された浜田省吾の 6 枚目のアルバム『Home Bound』のレコーディングに参加している。「ローリング・ストーンズのあのロックンロールピアニストのイメージが強かったけど、会ってみたらすらっと背が高くて優しい人で、モーツァルトとかシューベルトがすごい好きというクラシック派でした」「『バンドを集めて行くから、日本で一緒にツアーをやろう』と住所も教えてくれた」と、HP に記載されている。また、1992 年から 1993 年にかけて、日本の TV ドラマと映画の音楽を手掛けており、フジテレビ系のドラマ『逃亡者』『パ★テ★オ』『並木家の人々』の音楽、映画『ラストソング』のサウンドトラックも手掛けている。

ドキュメンタリー『セッションマン：ニッキー・ホプキンズ ローリング・ストーンズに愛された男』
9 月 6 日（金）より池袋シネマ・ロサ、アップリンク吉祥寺ほかにて公開！

■あらすじ

ザ・ローリング・ストーンズ、ザ・フー、ザ・キンクス、ジェフ・ベックをはじめとする 60 年代~70 年代に数多くのアーティストのレコーディングに参加した伝説のセッション・ピアニスト、ニッキー・ホプキンス。ザ・ビートルズのメンバー全員のソロアルバムにも参加した稀有な存在である彼は、素晴らしいピアノリフと音楽センスで多くのミュージャンを魅了し、250 枚を超えるアルバムと膨大な数のシングル・リリースに貢献した。しかし、この若き天才ピアニストの活躍は病との闘いでもあった。1963 年、病院に緊急搬送されたニッキーはクローン病と診断される。闘病生活を送りながらも、30 年以上にわたるロック人生において数々のミュージャンと共演し愛された“ 最高のセッションマン ” の物語を、彼を知る仲間たちが語る。

『セッションマン：ニッキー・ホプキンズ ローリング・ストーンズに愛された男』

監督・脚本・製作：マイケル・トゥーリン
製作総指揮：フランク・トルチア
共同プロデューサー：マイク・シャーマン、ジョン・ウッド
撮影監督：ルーク・パーマー
編集：アシュリー・スコット ナレーター：ボブ・ハリス
字幕監修：ピーター・バラカン／朝日順子
原題：“The Session Man”
配給：NEGA
2023 年 / イギリス /90 分 / カラー /16:9/HD/5.1ch/ 英語
©THE SESSION MAN LIMITED 2024

公式サイト：https://sessionman.jp
公式 X：https://x.com/thesessionmanjp
公式 Facebook：facebook.com/thesessionmanjp

【NICKY HOPKINS FOREVER】

ニッキー・ホプキンスは 1994 年 9 月 6 日、米国テネシー州ナッシュビルの聖トーマス病院で、腸の手術後に生じた併発症により、50 歳でこの世を去っている。若い頃からクローン病と闘いながら、音楽に人生を捧げて来たアーティストで、ドキュメンタリー『セッションマン：ニッキー・ホプキンズ ローリング・ストーンズに愛された男』を観れば、数多くのミュージシャンたちにどれだけ愛されていたかがわかる。リハーサルはほとんど行なわず、セッションスタジオで漫画を読みふけっていたとも語られているニッキー。2018 年 9 月 8 日には、ニッキーの記念碑としてピアノを模したベンチが設置され、ウエスト・ロンドンのイーリングにあるペリベール・パークで公開された。クラシック、ブルース、ロック、ソウル、ジャズ等々、ジャンルを超えて、個性的でありながらけして出しゃばらず、魔法の如く、職人の如く楽曲を輝かせたワンアンドオンリーなピアノプレイ、そして、その類稀なるセンスと才能は永遠です。

※ドキュメンタリーのタイトル以外の箇所は、全て「ニッキー・ホプキンス」として記載しています。

【NICKY HOPKINS Official Website】
https://www.nickyhopkins.com/